08年10月3日付、読売新聞・国際面の記事から

日本人墓地１００周年

印ムンバイ

きょう墓参会

インドのムンバイ（旧ボンベイ）にある日本人墓地が設置１００周年を迎えた。3日には在留邦人が墓参会を行って、明治期からアジア有数の商都を舞台に活躍した先人をしのぶ。（ムンバイで　永田和男）

最盛期３０００人居住

在留邦人のための墓地は、１９０８年（明治41年）にボンベイ日本人会が現在の市内ウォルリー地区で永代使用許可を受けたのが始まり。現地は今、市内有数のビジネス地区で、墓地内でも、近くの大通りを走る自動車の警笛が時折、聞こえる。

墓地を管理するムンバイの日本山妙法寺住職、森田捷泉（しょうせん）さん（60）によると、戦前からの日本人墓地は東南アジアではいくつか見られるが、南アジアでは珍しい。ボンベイで火葬された後、日本に遺骨が運ばれたケースも多いが、数か月の船旅を要した時代では家族が駆けつけるのも容易でなく、今なお日本人墓地で眠る遺骨も約30柱あるという。

供養塔の墓誌には、この

地で倒れた人々の名前と享年が刻まれているが、働き盛りの年齢の男性の多くは、綿花買い付けの商社員とされる。

明治政府の殖産興業政策の柱となった紡績の原材料である綿花は、当初中国からの輸入が主だったが、1890年代には英領インドからの輸入がこれを上回った。品質や、供給の安定性で中国産に勝っていたためとされるが、綿花貿易の拠点ボンベイでは当時、「日本人商人は英国人も行かない内陸の村まで足を延ばして買い付けている、と驚異の目で見られていた」（近代東アジア史専攻のマダビ・タンピ・デリー大准教授）という。

墓誌には、まだ若かった女性の名前も多い。いわゆる「からゆきさん」としてボンベイの歓楽街に連れてこられた人たちもかなりいたらしい。市内には次第に日本人街も形成され、鮮魚商や呉服店も並ぶにぎわいとなって、最盛期の昭和初期には約3000人の日本人がボンベイで暮らしていたと言われる。

日本企業のインド進出は近年、再び増加しているが、ムンバイ日本人会会員は現在約250人。森田住職は「今と比較にならない苦労を乗り越えてグローバルに活躍した先人を、そのDNAを受け継ぐ今の日本人が慰霊するのは大変意義深いこと」と述べ、墓参会に多くの人が参加するよう期待している。

ムンバイ日本人墓地100周年に寄せて

在留邦人の精神的拠り所

前ムンバイ日本人会名誉会長（前在ムンバイ日本国総領事）
萩生田　浩次

この度、ムンバイ日本人墓地が創建され一世紀という節目の年を迎えるに当たり、ムンバイ日本人会のご後援により、記念の冊子が刊行される運びとなったことを欣快に思います。

日本人墓地は、ここに眠る日本人がインドと出会い、この地に生き、その生涯を懸けて日本とムンバイ及びインド中西部間の交流の絆となった証でもあります。この視点に立ち、

まず、過去一世紀の日印交流の変遷を俯瞰（ふかん）してみたいと思います。

百年前の日本は、言わば近代国家建設過程の揺籃（ようらん）期にありました。一九〇二年（明治三十五年）に英国と締結した同盟条約を足がかりに、辛くも日露戦争に勝利し、さらに日韓併合を進めようとしていました。激変する極東の国際情勢の渦中で、日本は国の安全を守る一方、文明国に比肩する地位を築くべく、西欧型近代国家建設に邁進していました。

国内経済に目を転じれば、手工業的在来産業の蓄積の上に、西欧からの近代技術の移転摂取に努めていましたが、工業化が緒に就いたばかりの発展途上にあり、産業基盤は軽工業中心の、依然として脆弱な性格を有していた時期でもあります。

世界経済の景気後退を背景に、日露戦争による資源動員と消耗もあって、日本の地方や農村地域は概して疲弊していた趣で、ちょうど百年前の一九〇八年（明治四十一年）にブラジルへの移民が開始されています。

当時のインドは、日の沈むことなき大英帝国の威光を体現する、宝石にも例えられる植民地として、盤石の英植民統治下に組み込まれていたわけですが、二十世紀の初頭、コルカタに首都を置いた英領植民地政府がベンガル州をヒンドゥー教徒地域とイスラム教徒地域に分割する施策を発表したことがインドのナショナリズムを刺激し、国民会議派がベンガル分割案に反発し、スワラージ（完全自治）・スワデーシ（国産愛用）のスローガンを

掲げ激しい反英運動を開始する等、大英帝国の支配に反対するインド人の民族運動が本格的に始動します。

英国統治下のムンバイは、インド初期民族独立運動史を飾る中西部地域の政治的拠点として幾多の有力政治指導者の活動舞台となりましたが、同時に中西部の戦略的要衝に位置する商都として、首都のコルカタを凌駕（りょうが）する経済金融の中心都市であり、中東、アフリカ、欧州とインドを結ぶ最短の通商ルートの玄関口として殷賑（いんしん）を極めていたことはご承知の通りです。

このように、一世紀前は日本とインドは独立国家間の関係ではなく、日英同盟関係という大きな政治的枠組みの下での、特殊な相互関係でありました。それにもかかわらず、日本とインド間で経済通商を中心とする緊密な交流が醸成されています。

十九世紀後半以降のアジアでは、特にムンバイ及び中西部地域におけるインド近代紡績業の誕生を契機に、阿片に代わり綿糸・綿製品を主要産品とする綿業基軸体制の交易ネットワークが築かれ、諸地域間の貿易の急速な発展をもたらします。交易ネットワークを支えるインフラ整備の一環として横浜・ムンバイ間の海上航路が開設されるに伴い、日本の近代産業発展を主導した紡績業は大きく成長を遂げます。我が国の黎明期の綿工業の発展段階において、原料の確保や供給先としてインド、なかんずく、インド紡績業を牽引した

ムンバイは極めて重要な貢献を行ったと言っても過言でありません。

後世の貿易立国日本の片鱗を伺わせるように、その当時から経済商業活動等に従事する少なからぬ日本人が遙か天竺のムンバイや中西部地域の内陸部まで綿花買い付け等で足を運んでいた事実には感慨深いものがあります。因みに、十九世紀末の時点で、日本の対外貿易の約一割は英領インドとの貿易が占めていたとの記録がありますし、その後の第一次世界大戦を経て一九三〇年（昭和五年）代に至るまで日印貿易は順調に拡大していきます。

経済通商業務の拡大と歩調を合わせ、日本とインド中西部地域との人的な往来が活発になり、日本人同胞の権益擁護の観点から、一八九四年（明治二十七年）にはムンバイに日本政府最初の機関として日本領事館が開設され、また本邦に於いては、インドとの通商交流促進を図るため、一九〇三年（明治三十六年）に大隈重信や渋沢栄一によって東京で日印協会が設立されています。

百年前の時点ですでに日本とムンバイとの間で緊密な経済通商を軸とする交流が行われ、また日印友好関係発展のために尽力された方が多数存在した事実は広く知られて良いエピソードであり、これら先達の努力が相俟って現在の日印間に強固な友好関係が築かれていることを銘記すべきと考えます。因みに、一九三〇年（昭和五年）時点でムンバイ日本領事館が把握していた管轄地域の日本人は五百八十七名との記録があり、約八十年前に

も相当規模の日本人コミュニティが存在していたことが伺えます。

第二次世界大戦後、一九五二年（昭和二十七年）、日本と独立インドは外交関係を樹立しました。戦後の日本社会経済の復興期に、ムンバイを中心とする中西部からは、重工業の発展には不可欠の重要資源の鉄鉱石が大量に日本に輸出され、文字通り日本の経済成長・工業発展のための糧を供給する形での温かい支援の手が差し伸べられました。さらには、一九六〇年（昭和三十五年）代半ばにはムンバイ市と横浜市との間の姉妹都市関係が結ばれ、その後半世紀にわたり、日印間の唯一の市民自治体レベルの交流の窓口となってきたことも特筆されます。

いずれにせよ、日印関係は二つの世界大戦を挟み、国際情勢の流れに翻弄され、紆余曲折を辿りつつも発展し、今日では戦略的／グローバル・パートナーシップの枠組みの下、政治分野から国民交流までの広範多岐にわたる協力が進み、両国関係は一層緊密化しています。

ムンバイは引き続きインド第一の金融経済活動の中心地として、かつ新興国家の成長を象徴する商都として目覚ましい発展を遂げつつあり、これに伴い、最近では日本との直行航空便も開設され、地理的距離感が一挙に縮まり、経済ビジネス交流も着実に拡大を見ています。

一世紀の星霜の間に、在留邦人の中には図らずも当地ムンバイ及び中西部地域で死没され、ムンバイ日本人墓地に永眠される方がおられます。

この日本人墓地が一世紀の永きにわたり我ら同胞の霊を慰めるための施設としての機能だけでなく、時には在留邦人の精神的拠り所の役割を併せ担ってきたことを知り、崇敬の念を禁じ得ません。

日本人墓地の管理運営並びに節目での法要等の行事を献身的に行ってこられた日本山妙法寺西天竺ボンベイ道場、及びそれを側面援助されてこられたムンバイ日本人会、並びに同胞の慰霊の場所を快く提供されたムンバイ市当局、さらには、墓地施設の維持のために物心両面で多大な助力を継続してこられたビルラ・グループを始めとするインド経済実業家・篤志家各位のご支援・ご協力に対し、改めて衷心より敬意と謝意を表します。

かけがえのない人生を全うし、ムンバイ日本人墓地に眠る同胞諸氏の霊が安らかなることを祈念し、ご挨拶とさせていただきます。

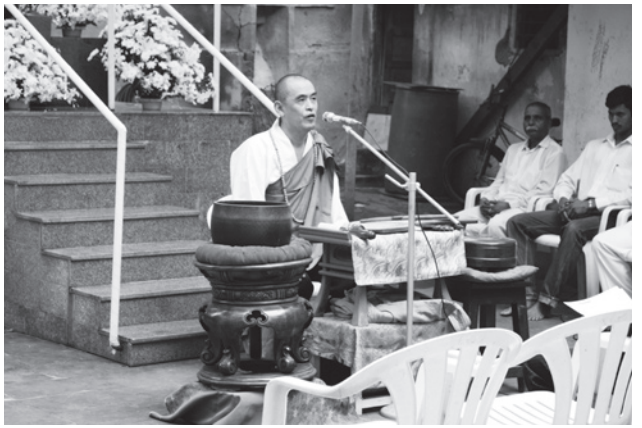
ムンバイ日本人墓地100周年に寄せて

一隅を照らす一条の光明となることを信じて

日本山妙法寺孟買道場主任
森田　捷泉

孟買で永遠に眠りに就かれている日本人の方々の霊魂を慰霊するために、また当山の開基原点ともなりました日本人墓地に托鉢（街頭修行）をしながら幾度となく足を運んでおります。以前よくお寺に宿泊されました旅行者の青年たち、諸々の目的を持って訪問参詣された方々をお誘いし、引率し、市中を巡っております。

町々の中のスラム街、現在移転させられつつある紡績工場の合間の長屋街、路上生活者



2008年10月３日に行われたムンバイ日本人墓地100周年記念の墓参会のおり、導師を務める森田上人

の方々は私たちが通過する頃を見計らって自分から履き物を脱がれ、足元にぬかずかれ、礼拝しながら五十パイサ、あるいは一ルピーを喜捨して下さいます。

インドでは聖地巡行者、行脚修行者の周りの塵までも貴い（たっと）とされ、その塵までも受け入れる意味で礼拝されます。ダルシャンと申しております。

町角で、道路上で、到る所で施す者、供に応じる者双方が但行礼拝し、お互いの心中の仏性を拝み合い、その光景を見ている通行人、窓から眺めている住居人までも平和な風光に浸ります。

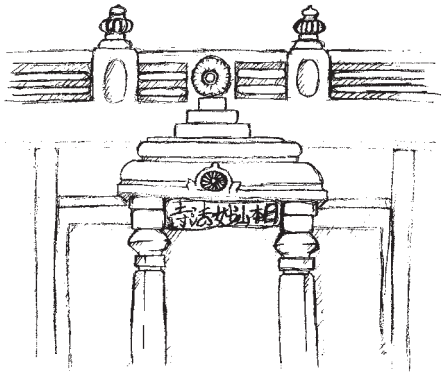
そのように街頭修行によって醸し出される、言辞に尽せない、何ともありがたい、貴い精神的な高揚を覚えながら町々を練って歩いて行き、ウォルリーの日本人墓地にたどり着きます。

まずお掃除をし、香華・灯明をして、玄題塔にインドの諸宗教融和のための祈願をし、供養塔に追善のお祈りを申し上げております。そうして同行された方々に日本人墓地の由緒をお話ししております。本当に数多くの方々にこのようにしてお参りしていただいております。

一九三二年（昭和七年）元旦の日本人墓地の写真に、トタン屋根に蓆掛（むしろが）けした掘立小屋の最初の御草庵が写っております。（口絵中の一九三三年撮影の写真参照）

蓆は当時の在孟買日本人の方々への正月用品が年末、日本から船荷され、その梱包に使われたものと聞いております。それをいただいたものです。

御師匠様は在留孟買日本人の方々から物心両面にわたる援助と理解をいただきながら日本人墓地の御草庵を前哨地として内なる祈り、精神性、宗教性で今まで人類史上未曽有のインドの政治革命、独立運動に立正安国の祈りを捧げられました。独立運動に参加された数十万のインドの方々は、その貴い犠牲壇に立たれましたが、人類は精神文明で救われるの



日本山妙法寺の前部

だという証を与えてくださいました。そうして未来に光明を掲げられました。

そのように由緒のあります日本人墓地が永年、在ムンバイ日本国総領事館、ムンバイ日本人会によって護持・運営され、整備され、荘厳されております。まことに有り難く感謝申し上げる次第であります。

このたび、孟買日本人墓地開創百年を記念して冊子が発行されますこと、まことに幸甚に思う次第であります。

ますます世界が経済的にも精神的にも、またあらゆる面で黒い大きな闇に覆われ、包まれていく今日、この冊子の発行が世界の一隅を照らす一条の光明とならんことを信じ奉りつつ。

平成21年(2009年)3月24日 火曜日 社会 24

お布施する女性の手は細く…

広がる格差

歩道沿いに無秩序に組み立てられたバラックの前で、女性たちが洗濯にいそしむ。車が警笛を鳴らしながら、狭い道路にあふれる人の波をよけて、そろそろと進む。午前六時半。目を覚ました ばかりのスラム街を、黄色い布「シュウラ」を肩から掛けた一人の日本人仏僧が、うちわ太鼓を鳴らして歩いていく。

仏僧は森田捷泉さん(六〇)。大久保美喜子さん(五五)＝天草市＝らの幼稚園建設を助けた現地の日本山妙法寺住職だ。「スラム街を歩きたい」と頼み込み、朝の街頭修業の托鉢に同行させてもらった。

ドン、ドン、ドンドン…。通りに太鼓が響き渡ると、路上に座る人々が頭をもたげる。サリー姿の女性が歩み寄り、履物を脱ぐ。合掌した後、細い手で森田さんの肩にかかる袋に小銭を入れた。男性が飲みかけのお茶を置いて、十一(約二十円)札をさげる。路上の店でカレー一種類と飯が食べられる金だ。

インドは仏教発祥の地。しかし現在の仏教徒は0・8%ほどだ。お布施をする者の中には、約八割を占めるヒンズー教徒もいるようだった。「彼らは宗教者など聖なるものを敬う気持ちが強い。自らの生活もままならないのに」

森田さんが昨年十二月、寺で運営する幼稚園で「クリスマス会」を開いたときのこと。イスラム、ヒンズーなど他宗教の子どもたちが一つのケーキを分け合い、小さな切れ端をうれしそうにほお張った。その姿を眺め森田さんは思った。「イエス・キリストの『心貧しきものは幸いなり、神の国はその人たちのものである』という言葉は本当だったんだ」

「人々の心に宿る神仏が争いを望むわけがない」とも言う。ただ広がり続ける貧富の格差に、人々の不満が募っているのも確かだとも付け加えた。

昨年十一月末、ムンバイの高級ホテルなどで同時多発テロが起きた。日本山妙法寺のあるウォルリ地区から直線で約八キロの場所だ。

パキスタンのイスラム過激派の関与が有力視される。背景には、領土問題や宗教対立があるという。ただ、一部の過激派の動きに、ムンバイのスラムに暮らすイスラム教徒たちはまゆをひそめる。

街頭修業も終わりに近づいたとき、スラムと〝超〟高層マンションとを隔てる五㍍ほどのフェンスが目についた。その向こう側にある青い芝の公園で、ポロシャツ姿の紳士たちが朝のウオーキングに汗を流していた。

(原大祐)

お布施をした女性にお経を上げる森田捷泉さん。女性は履物を脱いで、手を合わせた＝インド・ムンバイ

天草からつなぐ明日 インド・ムンバイリポート 6

2009.3.24

ムンバイの日本山妙法寺住職、森田捷泉さんが同市内を街頭修行する様子を報じた熊本日日新聞の記事（平成21年3月24日・朝刊）